

TETSU ARIYOSHI

有吉徹



[こんなにも豊かでこんなにも貧しい] 1989
h212×w190×d21.5cm

木材・エポキシ樹脂、シルクスクリーン、他
photo: Takatomo Usui

1 ■ A

作り手一作品一観者の関係では、どれが代表作かは、観者の側が決める問題です。「自己」というものが、瞬間瞬間の記憶と思考の総合であるように、私の作品もそれそれが、その瞬間瞬間の私の感性と思考とを代表しています。ここでは敢えて、最近作という意味で「こんなにも豊かでこんなにも貧しい」を選んでおきます。

1 ■ B

まず木材で作品の土台を作り、その表面に合成樹脂で塗装を行ないます。その上に雑誌・新聞等の印刷物から切り抜いた映像や文字を転写したり、シルクスクリーンで印刷してゆきます。切り抜く映像・文字は人々の消费需求を煽り立てるかのような、売りことば等が主となっていますが、その選択に厳密な基準は設けません。また、何をどこに印刷するかも、その瞬間瞬間の感覚に委ねます。この様な作業を繰り返す中で雑多な映像や言葉がもつれながら作品全体に固有の意味を形成し、同時に現在の社会のあり様を映し出してゆくところに作品のコンセプトが在ります。

2 ■

常に人々の中に存在しながらも、常にまた言語がもたらす意味性や価値基準よりはみ出し、とり残されているまなざし。その覚醒に向けてなされる嘗み。

3 ■

いわゆる美術史とは、たんに個々の作家たちの活動や作品群を、ある特定のまなざしの下に文脈づけたものに過ぎず、そこには少なからずレトロリックに潜む欺瞞の構造が在ります。それゆえに、自らの作品について美術史との関係で語ることは、その欺瞞性と共に犯関係を結ぶことにつながります。作り手に要求されることとは、むしろ逆に美術史云々による教育を通して抑圧され定されてしまった感性を、いかに解放してゆくかにある訳ですから、この設問の答えは、私の作品に実際に触れた人々の判断に委ねるしかありません。また、美術史という過去からの文脈ではなく、常に現在の社会構造との関係で自分自身を位置づけるべきだと考えます。

4 ■

デュシャンのアン「ラマンス、ミニママル・アートの明証性、ウォーホルの消費社会、R・バルヨンの「映像と修辞学」とテクスト論、J・デリダの「Glosses」の文章構造、社会学における「ライヴァタイゼーション」に関する研究、大村仁志の限りなく透明に近い表現、数多くの写真論等々、数限りなくあります。詳述は困難です。

5 ■

現実の日常をとりまくあらゆる状況に関心があります。ただし、その表層的な個々の出来事ではなく、それらを用意する根本的な構造をどこまで深く把握し、読み直してゆけるかという意味においてですが。

